

# シリーズ 第14回 この本をあなたにも薦めたい

## 『郷愁』（ペーター・カーメンチント） ヘルマン ヘッセ著

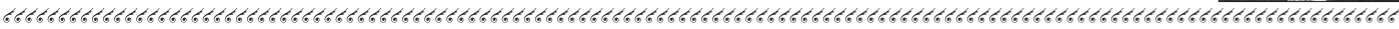
ヘッセは、ご承知のとおりドイツの小説家、抒情詩人であり、南独カルプの牧師の家庭に生まれた。その後、紆余曲折の末1904年の『郷愁』の成功で作家の生活に入ったとされている。この『郷愁』は『車輪の下』と共にヘッセの自叙伝でもある。その内容は母のこと、父親のこと、憧れた女性のこと、心が通じた友人のこと、旅や様々な出会いの中で付合いが始まった人々のことなど、日頃、我々が生きているうえで、出会うだろう普通に

平凡なことを通じて、人の生き様を描いている。皆さんの学ぶ専門が理系であろうと文系であろうと、一度は専門書と共にこの本を読んでいただきたい。そして、10年に一度は読み返してもらいたい。そんな気がする一冊だ。ただ、この本は人が進むべき或いは歩むべき指針や方向を示すようなものではなく、何処にでもいるだろう一人の人間が、幼年期から青年後期迄を過ごしたみちすじをたどる形

で叙情的に語られている。この本を読む時、本の方から問いかけてくる様な、常に何らかの会話が出来ているような気持ちになる本である。人は誰でも、生まれた場所、育った場所としてのふる里があるが、この本は心のふる里を感じさせる一冊でもある。原題名は「ペーター・カーメンチント」人の名前だが、訳者高橋健二はこれを「郷愁」とした。名訳だと思う。



監事 柘植 章



## 奨学生の留学体験報告 大西 正也 大阪大学外国語学部外国語学科ベトナム語専攻4年（加納高校卒）

ベトナムから日本へ戻り3ヶ月間ほどの準備期間を経て、現在私はイギリス・ロンドンへと来ています。それによって現在では「日本とベトナム」、「日本とイギリス」を比較するだけでなく「ベトナムとイギリス」という日本以外の2国の比較をすることもしばしばあります。これらの国々の文化、慣習の違いは実に興味深いもので、ときに違和感を感じたり理解に苦しむこともあります。広い視野を持ち、あらゆる文化、慣習を受け入れようと常に心がけてきました。

世界都市ロンドン、その中心地はさまざまな人とものが密集したまさにグローバルワールドの中心地です。しかし意外にもそこは、東京のように高層ビルに囲まれずすべてがハイテクというわけではなく、ビッグベンを含む国会議事堂やパッキンガムパレスのような歴史的建造物に加え、ハイドパークやグリーンパークといった広大な公園が広がっています。とくにそういった巨大な公園を見たときは、なぜこんな大都市の中にこれほど大きな公園を設け、維持し続けられるのかという驚きと感動で圧倒されました。

これらの公園は、ロンドン市民の癒しの中心地と言えるほど毎日多くの人々ににぎわっています。犬と散歩をする人、マウンテンバイクでサイクリングをする人、ローラースケートの練習をする人、芝生に寝転がって本を読んでいる人など、さまざまな目的で多くの人がそこを訪れ、思い思いのことをして楽しんでいます。私も時々そこへ行っては芝生に座って新鮮な空気と大地のあたたかさを感じ、その広大さに心が洗われ、すっきりした気分になりますし、何度も足を運ぶうちに本当に多くの人に愛される、なくてはならない公園なのだと気づかされました。

私はここ数ヶ月間アルバイトもしています。ある日たまたま入ったカフェが実はベトナム風のカフェであり、ベトナム留学経験のあった私はそれを売り込み、数時間のトライアルを経て採用されました。まさかこんな形でベトナム語が生きるとは思ってもいませんでしたので、驚きとベトナムに対する感謝でいっぱいでした。現在は人員の都合でそのカフェの支店レストランで働いています。そこではオーナーがベトナム人、マネージャーがウズベキスタン人と国際色豊かな職場になっております。お客様はほとんどが現地人の方で、イギリス人の方がどのように食事をし、どのようにふるまうのか自分の目で観察することができ、とても興味深いです。そこでも文化、慣習の違いを身をもって感じる機会が多いです。たとえば日本ではチップなど払わなくともお客様に最高のサービスをするのは当然のこととみなされていますが、こちらではお客様が満足した分だけチップに還元して会計の後に席においていくのです。この文化は有名ですが、実際にお客様がおいでいられる料金や、最近イギリスでもチップは当たり前ではなくなってきている、という事実を考慮すると初めはすごく驚きました。私は日本での接客方法と同じように接客していますが、イギリスの方々の評判は非常に良いと自負しています。そこから、日本の接客

文化は世界に誇れるほど質の高いものだと感じるようになりました。レストラン自体も盛況で、アジアンパワーのようなものをひひしと感じております。これらの経験は私に「海外でのビジネス」を意識させ、そこから派生して、もし自分ならこの国に日本のこういったものを売り込めるか、またそこまでいかにとどういった日本の料理、文化、伝統を紹介すれば彼らに興味を持ってもらえるかなどと考えてみる機会が多くなりました。

グローバル化が進み、地球全体がフィールド、行動範囲とみなされる現代、何事も世界規模で考えてみると今まで思いもしなかったものが価値を帯びてきたり、おもしろいものだと気づくことがあります。日本人に生まれたことに誇りを持ち、世界の人々にさらに興味を持っていただけるような国に自分の力でしていきたいと強く感じるとともに、もっと自国「日本」を深く知り、理解することが必要であるとも感じております。

私が通っている語学学校は比較的アジア人の比率が低く、多くはヨーロッパから来た学生です。渡英当初はヨーロッパの人々が話す英語は、母国語訛りがアジア人と違うため、かなり聞き取りづらく、コミュニケーションが全くと言っていいほどとれない時もありました。しかしそんな中でも自然と友達はでき、少ないがキャブラリー、単純な文法でも「通じ合う」という感覚の大切さを感じました。

ベトナム留学、そして今回のロンドン留学を通して、私は1つ強く感じたことがあります。それは、人と人がつながるときには、言語以上に大切な何か関わっているということです。私のように言語習得を目的として留学していると、とにかく言語を完璧にしようと、そこにばかり目がいきがちで、一番大切なことをついつい忘れてしまう時があります。それは、「言語とはコミュニケーション手段の1つであり、誰かと関係をもつ時、つまり友人を作るときには言語よりも自分の心、気持ち、考え、人間性のほうが大切だ」ということです。英語がペラペラならば世界中のだれとでも友達になり、幅広い友人関係を築きあげることができるでしょうか。私はそうは思いません。人と人が交流するときには、少なからず国籍、宗教、文化に加え人それぞれの人生背景、その時の気持ちの状態など、その人を構成するすべてが一気に伝達されます。それらすべてを考慮し、思いやり、自分の意見を持ってぶつかることがコミュニケーション、そして人と「つながる」ということだと私は考えています。

そのためには様々な国の歴史や、他国の文化を積極的に理解し、時に楽しんでしまうほどの柔軟性が必要です。言語とはこういったものの後に必要とされ、私たちの「つながり」をスムーズに行うための手段にすぎません。もちろん言語の勉強は大切ですし、言語力がなくては満足に自分の考えを伝えることはできません。しかしそれ以上に、一人間としての自分自身を見直し、人としてさらに成長することがなにより大切であり、それこそが自分の人生を豊かにするのだと考えております。

平成24年度スポーツ振興事業並びに地域振興事業募集中 詳細につきましては、下記財団ホームページをご覧いただくか、事務局へお問い合わせ下さい。締切日(期印有効) 5月15日

**公益財団法人 伊藤青少年育成奨学会事務局**  
〒507-0062 岐阜県多治見市大針町661-1  
TEL 0572-20-0800(直) FAX 0572-29-1168  
E-mail: webmaster@ito-zaidan.or.jp  
U R L: http://www.ito-zaidan.or.jp/  
発行: 公益財団法人 伊藤青少年育成奨学会  
印刷: トーヨー印刷株式会社

**伊藤青少年育成奨学会 奨学会だより**  
2012.4.1 vol.14 年2回発行 (4月・10月)  
「奨学会だより」でつなぐ夢の架け橋  
平成23年度スポーツ振興支援校報告書  
奨学生の声紹介  
奨学生の留学体験報告  
平成24年度スポーツ振興事業並びに地域振興事業募集中  
シリーズ 第14回 この本をあなたにも薦めたい

## “奨学会だより”でつなぐ夢の架け橋

伊藤青少年育成奨学会と、奨学生のみなさん、スポーツ振興のため支援する県下の高等学校の運動部員のみなさん、そしてこれから奨学金を受けたいと希望しているみなさんをつなぐ架け橋として「奨学会だより」を発行しております。わたしたち奨学会は、郷土・岐阜の未来を切り拓く青少年のみなさんが、その夢を実現することができるようにと、平成12年から資金援助を行っています。

## スポーツ振興支援① ……平成23年度スポーツ振興支援校からの報告書の一部です。

この度は、伊藤青少年育成奨学会スポーツ振興支援事業の支給対象校に本校陸上競技部を指定していただき、心よりお礼申し上げます。本校は「開拓者の気魄で勉学とスポーツにあたり、礼儀正しくあれ」という校訓のもと、部活動が盛んに行われています。しかし、施設や練習道具に恵まれた環境というわけではありません。また部員も3学年を合わせると70人という近年珍しい大所帯。練習を工夫してみるものの、道具が足りません。どうしようかと困っていたところ、このスポーツ振興支援事業の活動を知り、早速申し込みました。幸いなことに支給対象校に指定していただき、感謝の気持ちと共に支援してくださることに感激いたしました。ハードル器具以上の練習(より素早く思い切った動きに挑戦できる)や、基礎トレーニングができる、「フレキハードル」という器具を買わせていただきました。本当にありがとうございました。部員に「伊藤青少年育成奨学会スポーツ振興支援事業」について説明し、「トレーニング器具がほしいとお願いしたところ、買ってもらえることになったよ」と話すと、部員たちは満面の笑顔になり、「すごい、そんなことがあるんだ」と飛び上がって喜んでおりました。「みんなが頑張ってるからね、こうやってみんなを援助してあげよう」という人が現れてくるんだよ」と話すと、1人の部員が突然「先生、こんなうれしいことはないです。僕たちは部活動の成績で伊藤青少年育成奨学会の人にお礼をしたい。だからお礼状を出すのは県高校新人大会が終わるまで待ってほしい。」と申し出てきました。日和田高原で行った夏の合宿でも戴いたフレキハードルを持参し、関商工、東濃実業との合同練習にも持参して練習しました。学校での普段の基本練習・ハードルの技術練習等でも部員たちは積極的にフレキハードルを使って練習する姿が見られるようになりました。

この練習を通して、彼らの心の中が変わっていきました。自分たちを応援してくれる人たちがいるという具体的な実感でも言うのでしょうか。おかげさまで9月17日、18日に行われた県高校新人大会では、男子総合4位、トラック2位、男子800m、1600mリレーで優勝するなど、周りの学校が驚くほどの成績を上げることができました。(女子はまだまだこれからです。)中学では無名に近い部員たちが学んだこと。それはあきらめず努力すれば、自分たちでも成果を出せるということでした。本校陸上競技部は、県下の中で唯一、インターハイ男女総合優勝をした伝統校です。本校陸上競技部出身の諸先輩方も多く、いつも温かく私たちの活動を見守り、励ましの言葉をいただいております。まだまだこの諸先輩たちには追いつくことはできていません。部員たちを支えているものは、活躍を見守り、援助し、応援してくれる人々によって自分たちが活動しているという充実感です。一人では何もできない。でも支えてくれる人に活動で応えたいというその思いが、今回の結果につながったと思っております。また技術面だけでなく、部員たちの心を育てるのにこのフレキハードルが役に立ったと実感しております。今後も支えていただいている方々に感謝しながら、11月に行われる県高校駅伝6位入賞、東海駅伝出場、来年はインターハイ出場という目標に向かって、更なる活動を続けたいと考えております。この度の温かいご支援に対し、顧問並びに部員一同、心よりお礼申し上げます。

県立長良高等学校 陸上競技部 顧問 藤村純子

今年度は、本校水泳部へ多額の支援金をいただきまして誠にありがとうございました。支援していただいたお金で、本校屋外プール用のコースロープを2本購入させていただきました。本校は、50m×8コースのプールを有しております。50mプールは岐阜県内の高等学校に3校しかありません。水泳部の活動も活発に行われており、毎年5月から9月まで本校プールで練習をしています。しかしながら、コースロープの本数が足りずに8コース中5コースしか練習で使用できず、50mプールという大変恵まれた環境を生かされていないのが現状でした。今回購入させていただいたコースロープにより、すべてのコースを使用して練習が行えるようになり、練習効率や効果が飛躍的に向上しました。また、本校の50mプールという良い環境を求め、東濃地方を中心に多くの岐阜県内の高等学校や、スイミングスクールの選手が練習に来るようになりました。本校の生徒は、合同練習や他チームの練習姿を見ることができ、泳力・意識共に急成長をしています。このよ

うな環境が整い、生徒が成長することができたのは、理事長の伊藤喜美様をはじめ、伊藤青少年育成奨学会の皆様のおかげと心より感謝しております。今年度本校水泳部は、男子6名、女子6名の合計12名が東海大会に出場という近年では最高の成績を収めることができました。また、目標としていたインターハイの出場は逃してしまいましたが、女子部員が1名国民体育大会に岐阜県代表選手として出場することが決まりました。この結果は、コースロープが購入でき、練習効果が上がったからだと感じています。今後は、東濃地方の水泳の拠点校として、全国で結果を残すべく努力をしていきたいと思っています。最後になりましたが、あらためて理事長の伊藤喜美様、そして伊藤青少年育成奨学会の皆様にお礼を申し上げるとともに、今後とも中津高校水泳部をよろしく願っています。

県立中津高等学校 水泳部 顧問 山口勝太



## スポーツ振興支援②

……………平成23年度スポーツ振興支援校からの報告書の一部です。

この度は、伊藤青少年育成奨学会スポーツ振興支援金をいただき、誠にありがとうございました。

本校は、平成19年に岩村高等学校と明智商業高等学校が統合して生まれた総合学科の高校です。学校は大正村で有名な恵那市明智町にあり、恵那市の南地区を中心に広範囲から生徒が通学しています。

しかしながら、若年層人口が減少している上に、恵那市の中心から明知鉄道で50分、瑞浪市の中心からもバスで50分という本校の立地条件も影響し、生徒数は減少傾向にあります。そのため必然的に部活動予算も少なくなり、どの部活動も少ない経費でやりくりしているのが現状です。こうした時にご支援をいただいたことは、卓球部だけでなく、本校のすべての部活動にとってたいへんご助力をいただいたものと感謝しております。

本校卓球部は、今年度、男子25名、女子2名の合計27名で活動しています。まだまだ特筆するような成績はありませんが、将来的には全国大会出場を目指し、近くは県大会で活躍できることを目指しています。そのような弱小とも言える部活動に対しても、今回のように支援していただいたことは、「今は強くはないけれど頑張っている」大半の高校生にとって、大きな希望を与えていただいたものと思います。また、卓球部に入部してくる生徒の中には、「運動は得意ではないけれどスポーツはしたい」生徒がいるという傾向も多くの学校で見られます。そのような高校生にまで支援していただけるという意味においても感謝に堪えません。ありがとうございました。

卓球というスポーツは、用具・選手により、全く異なる球質をあやつるスポーツです。そのため、絶えず違った相手と練習を積み、百人百様の球質に慣れておかなければなりません。しかし、前述したような学校の立地条件もあり、頻繁に他校へ練習に出かけたり、他校に来ていただくこともままならない状況です。その不利な条件を補い、多様な球質に慣れることを目的として、今回いただいた支援金で、卓球マシンを購入させていただきました。

今後もご支援いただいたことの重みを十分に認識し、感謝の気持ちを持って行動できる生徒の育成に励みたいと思います。この度は本当にありがとうございました。重ねてお礼申し上げます。

<b>県立恵那南高等学校 卓球部</b>	<p>学校長 大嶽和好</p> <p>顧問 奥村直之</p>
----------------------	--------------------------------

県立恵那南高等学校卓球部（平成23年度）

（前段省略）

投擲競技のハンマー投げ・円盤投げは回転競技であるため、投擲方向をコントロールするのが非常に難しい競技です。失敗投擲による不慮の事故を防ぐことはもちろん、投擲距離を伸ばすために、最高スピードにおける技術を身につけるためには、安全かつ思い切り投擲練習をおこなう環境が必要になります。投擲用のゲージ「ハンマー投囲い」は、そのために必要不可欠のものとなります。施設設備・業者の選定・値引き交渉、そして購入金額の不足分にあたる必要経費の捻出に時間を要しましたが、後は業者による施設・設備の設置を待つのみとなっております。2月上旬には、搬入・施工が完了する予定で、雪も収まり寒さや和らぐ頃にはグラウンドで思い切った投擲練習・投げ込みにより専門技術の探究、専門体力の習得ができることを楽しみに、現在は基礎的な体力・基礎トレーニングを積み重ねています。

本校の投擲ブロックの1・2年生は男子生徒1名・女子生徒2名と少数ですが、日本選手権ハンマー投げで入賞した(H23年度は8位入賞)女性教員1名の指導のもと、全員が県の国体強化選手に選ばれ、日々切磋琢磨しています。岐阜県内の大会はもとより、東海・全国で活躍することを目標に取り組んでおり、新しいシーズンでは地元開催となる岐阜国体の得点獲得に貢献できるように意気込んでいます。

寒さと雪に閉ざされる飛騨地方の冬を耐え忍びながら熱い気持

先日はスポーツ振興支援金を頂きありがとうございました。おかげ様で、フェンシング用品(ハイブリッド・ピスト1本)を購入することができ、本校フェンシング部員はもちろんのこと、本校フェンシング部OB関係者等もたいへん喜んでます。2012年に開催されます、ぎふ清流国体に向け更に充実したトレーニングが出来るようになりました。

フェンシング競技は、ヨーロッパを中心に親しまれていますが、道具や機材も全て輸入品になります。また、ここ数年でかなりのルールが改定されてきています。本来なら、その度に審判器の購入や用具等、新しく用具購入をしなければならないのですが、学校やクラブチームでは、急な対応ができず、やむを得ず旧式の用具等を使って練習を行っていました。そんな状況の中で、顧問としてなんとかしてやりたいと思っていましたが、ようやく今回のこの事業により、用具が購入でき、大会と同じ状況でトレーニングができるようになりました。

従来は、試合場を設置する際に、重いピストを数人で運び、そのピストを固定する為に両サイドをガムテープで貼るなどかなりの時間と労力を有していました。今回購入できたハイブリッド・ピストは、ひとりで持ち運びができ、固定する際のガムテープも必要なく、設置時間を短縮することができます。またその規格も世界大会規格で上級の大会で使用されています。これで全国大会や国際大会と同様な状態でのトレーニングが可能になりました。高額なために1本しか購入出来ませんでした。が、生徒や選手達は、より充実したトレーニングに励むことができ、改めてこのスポーツ振興支援金への感謝の気持ちが強くなっています。

今後は、これを機に、ぎふ清流国体の成功に向け、本校フェンシング部を含め岐阜県のフェンシング選手が一丸となって頑張っていきたいと思います。そして、将来的には、全国大会や国際大会などを、この岐阜で開催できるようになると良いと思っています。その為にもフェンシングと言えば岐阜と言われるように一層努力していきたいと思いたすので、今後もご支援、ご協力をお願い致します。本当にありがとうございました。

<b>県立大垣南高等学校 フェンシング部</b>	<p>顧問 鈴木元宏</p>
--------------------------	----------------

県立大垣南高等学校フェンシング部（平成23年度）

ちで乗り越え、春季トレーニングへの移行を季節の変化に合わせながらじっくりおこない、夏のシーズンに向かっていくことが成長と成績を決定づける大事な要因になります。来たるべき春を心待ちにし、元気に取り組んでいます。

益田南高校・益田高校の学校統合により、新しい学校『益田清風高校』としてのスタートを切ってから7年が経過しようとしています。地域の生徒を地域で育てるという人間育成の土台にたって、競技では全国で戦うことを目標にして日々の積み重ねをしています。田舎だからこそ純粋な気持ちで一生懸命取り組む生徒達が、大きく伸びていってくれていると思います。中学の生徒との合同練習会・合同合宿では、後輩達の良き手本であり憧れの存在でもあります。身近な先輩達の活躍に刺激を受け、「自分にもできる」「私達も!」という挑戦が数多くみられるようになってきました。また、地域の方々から多くの“声”も身近に届きやすいため、多くの支えがあることを実感することで感謝の気持ちが生まれ、郷土に対して誇りも芽生えています。そういう中で、地域と岐阜県の陸上競技界をリードしていく存在になれるように、更なる一歩を踏み出していきます。

今後も、益田清風高校陸上競技部は「スポーツを通じて青少年の健全育成に取り組む」決意でいます。応援よろしく申し上げます。

<b>県立益田清風高等学校 陸上競技部</b>	<p>顧問 塚中一成</p>
-------------------------	----------------

### 奨学生の声

……………2011年11月までに提出された学業状況報告の一部です。

<b>田中 梨菜</b>	<p>金沢大学人間社会学域学校教育学類4年(恵那高校卒)</p>
--------------	----------------------------------

3年の夏休みの1ヶ月間、金沢大学附属中学校にて教育実習を行いました。全てが初体験だったため、不安しかない状態でスタートでした。しかし、実習を終えた今は、充実感しありません。

実習では、授業以外にも、掃除やホームルームなどの時間も生徒と過ごしました。中でも、生徒との距離が近くなったと感じたのは、昼食の時間でした。いろいろな席をまわり、多くの生徒と会話することができました。

授業では、私は数学を担当しました。授業を通して大きく2つのことについて学びました。1つ目は、授業準備についてです。1時間の中で、どうしたら生徒の興味・関心のもてる授業を行えるのか、課題を深めるにはどうし

<b>森田 龍平</b>	<p>早稲田大学創造理工学部建築学科4年(大垣北高校卒)</p>
--------------	----------------------------------

3年前期は美術館と小学校を主に設計しました。今回は小学校のプレゼンボードの縮小版を冊子にして同封致しましたので、もし、よろしければご覧になってみて下さい。自分の出身小学校を30年後に計画せよという課題で、敷地調査からはじまり基本計画、意匠計画、構造提案、製図、プレゼンテーション、模型製作を行いました。田舎の私の地元では、将来的な少子化が避けられない現状としてあり、また高齢化により放置された竹林、森、田畑があります。それらから得られる建材を用い、何年かに一度建物自体をつくり替えてゆく提案です。それを教育プログラムの一環とし、祭のよう

<b>浅野 佑斗</b>	<p>岐阜大学教育学部理科教育課程物理学2年(岐山高校卒)</p>
--------------	-----------------------------------

私は教育学部に所属しています。そのため私の周りには、教員になりたいという強い希望と夢を持った仲間たちが、たくさんいます。そのため、お互い自分の夢などを語り合っているうちに、自分の夢でもある教員になるという気持ちは、より強くなっています。岐阜大学では一回生の時から岐阜大学附属小学校・中学校での教育実習を行ないます。その実習でも、自分たちが生徒として授業を受けていた時とは違う目線で教員の方々の授業を見ることで、教員の大変さ、そして生徒の成長を間近で見られる面白さを知りました。それによって、より教員になるという夢を叶えたいという決意が強くなりました。

そして、私は、この半年、教師になりたいと思うと共に、3月に起きた震災に対して、教師として、また教師を目指す私たちは教育という観点からどのようなことができるのだろうかということも考えていました。そして、その考えを行動に移すため、愛子カラという団体を通して福島っ子サマーキャンプという活動に参加させていただきました。これは被災地に直接行ってボランティアに参加するのは金銭的な面でも厳しいこともあり、愛

#### 四方 雅隆

富山大学医学部医学科2年(大垣北高校卒)

大学に入ってから半年、普段の授業はまだ医学と一見関連が薄そうな教養系だが教養が実は将来医者になってから、嫌でも身に付く医学知識より大事なのではないかと感じています。前期に2つ実習をさせていただいて医者の卵として考えさせられることがたくさんありました。1つ目は早期臨床体験です。これは3人1組の学生が研究科と臨床科を1日ずつ見学に行くというものです。私は消化器内科と統合神経科という脳の研究を行う科に見学に行きました。胃カメラの様子やカンファレンス、最新の研究などを見学させていただいて医学のおもしろさを学んだ研修でした。

2つ目は介護実習です。私は「セーナー苑」という施設に伺いました。そこで、障害、または自閉症などの精神疾患を持つ方々と触れ合い、「障害

#### 高木 祐希

東京大学理科Ⅱ類2年(美濃加茂高校卒)

東京大学で様々な講義を聞かうちに、脳に関わる研究、特に夢に関する研究がしたいと思うようになりました。夢は随分昔から注目され、研究されてきていますが、そのメカニズムはまだはっきりとは解明されていません。最近では、夢のもつ特徴を、統合失調症やうつ病といった精神病理の治療に役立てるための研究も進められています。1年の後期課程では、これらについて深く勉強するため、ゼミにも参加しました。夢はまだ、一般的な合意の得られにくい分野であるだけに、文献によっても主張する内容が異なることもよくあります。正しい結論を導き出すためには、一般的な知識を絶対的なものとしてそれを理解、暗記しようとする高校までの勉強とは違い、今までに得られた見解を理解しつつもそれをどこかで疑う姿勢をとりつづけなければなりません。高校までの勉強法が定着してしまっているせいや、理解しながらも疑う、とい

たらよいか、など…常に、試行錯誤をしました。2つ目は、教材研究についてです。教科書の問題が解ける!それだけでは、授業はつくれず、より深くまで教える側は勉強しないといけないということを学びました。

今回の実習を通して、机上の学習では学べないことを、身をもって学ぶことができたと思います。この経験を活かし、さらに、精進していきたいと思ひます。

<b>奨学会からのコメント</b>	<p>学生の頃、「例題」は予習しておくのが当たり前と先生がおっしゃった。より深く学ばせようとしての言葉と今更に理解した。頭がさがります。</p>
-------------------	--

にしてその行為を伝承させてゆくという展開にしました。1年の頃から楽しみにしていた課題で、つらいことも多かったですが、自分にとって非常に実りある課題でした。多くの仲間と語り合い、とても充実した学業生活を送っております。後期もまた、自分と向き合い、楽しんでいきたいと思ひます。

<b>奨学会からのコメント</b>	<p>冊子を変面白く拝見。お百姓は常に畦を修復する為、左官技術に秀でているとか。種々の技術はかつて生活の中にあったもの。「結」の復活を。</p>
-------------------	--

知でできるボランティア活動として、夏休みの間、福島県伊達市の子どもが放射能から一時的な避難をするため愛知県に合宿に来ていて、そのスタッフとして活動し、子ども達に勉強を教えたり一緒に運動会の運営を手伝ったりしました。その活動を通して、震災で僕たちが想像できないくらい辛い体験をした子どもたちが、本当にたくさん笑ってくれたり、楽しそうに話しかけてくれた時には、教育実習では得られなかった、また別の喜びを感じました。このように、震災などで精神的に疲れてしまっていたり地震がトラウマになってしまっているであろう子どもたちとも、将来的に教師になってから関わっていくことがあると思ひます。そのような子の精神的なケアをするというのも教師になる上では大切な技術なのだということを学んだ貴重な体験でした。

<b>奨学会からのコメント</b>	<p>愛知県のボランティアに参加してくれてありがとう。余計なことではあるが「参加させていただきました」というと陛下に御臨席賜るレベルの尊敬語か。「参加しました」が相当。教師志望だからあえて。</p>
-------------------	---

者」という言葉の矛盾を感じました。一口に障害者と言っても一人一人の方に個性があり十人十色だったからです。医者の卵として「患者さん」「老人」「障害者」というような大きすぎる言葉の区分けを越えて一人一人を個性を持つ人として、一人一人に向き合えるようになりたいです。

このように実習と授業を通して医者にできることはなにか、何がしたいのかを日々考えています。厳しくも充実した日々に感謝しています。

<b>奨学会からのコメント</b>	<p>医学を志す者の大切な第一歩の体験でした。しかし、老人・障害者への施策を前進させるには抽象化・概念化が必要だから常に総論各論の往復ですよね。「させていただく」という敬語用法は上記に同じ。</p>
-------------------	---

う姿勢をとるのはなかなか僕にとっては難しいことです。しかしこの姿勢は、これから新たな事実を発見していく人間にとっては必要不可欠なものなので、是非ともこれから身につけていきたいと思ひます。

夢の研究をするするには、医学部に進むのが適している、ということが教授らのお話からわかりました。東京大学の進学振り分け制度で医学部に進むためには、今よりも高い平均点が必要になります。どうなるかはわかりませんが、一層努力し、医学部進学を目指して勉強してみたいと思ひます。

<b>奨学会からのコメント</b>	<p>「疑う」というのは必ずしも否定することではない。主旨をより深く発展させる過程で、推論と整合性の取れないものを検証するやり方もあり、対立概念を包括し発展させる弁証法という思考法もある。</p>
-------------------	--